

# 「義勇軍行進曲」の時代を重層的に 作曲者・聶耳の人物像をめぐつて

岡崎 雄兒

久保亨著

日本で生まれた中国国歌

「義勇軍行進曲」の時代



四六判 264頁  
岩波書店  
[本体 2,400円 + 税]

今年は中華人民共和国建国七〇年。建国五〇年時には天児慧氏、国分良成氏、いまは亡き小島朋之氏ら現代中国研究の第一人者が揃って建国五〇年の関連書籍を刊行された。

七〇年にあたる今年はどのような企画があるのか知らない。本書も建国七〇年を意識して刊行されたのかどうか分からない。だが今年は一九三五年七月、日本で客死した聶耳（ニエ・アル）が作曲した映画主題歌『義勇軍行進曲』が、暫定ながら中国国歌に選定されて七〇周年になるので、本書の刊行は時宜を得たものと言える。

本書はこの「義勇軍行進曲」の時代を、この曲の作曲者である聶耳、国民党の要人で文化政策策定のトップの座にいたとされる邵元沖、さらにその妻で女性の地位向上をめざす教育に情熱を傾けた張黙君の三人にスポットをあて重層的に再

現したものである。

著者はプロローグで本書を執筆された動機として次のように述べておられる。

聶耳が一九三〇年代上海の左翼的な映画人ネットワークの中にいたことから、そして「義勇軍行進曲」が革命で成り立った人民共和国の国歌に採用されたことから、彼については革命運動に献身したという文脈で語られることが多い。中国で書かれた評伝「王懿之、一九九二」にも、日本で刊行された伝記「岡崎、二〇一五」にもそうした偏りがみられる。その結果、彼が当時の中国にいた多くの普通の若者の一人であった事実が見落とされ、彼を育んだ時代全体に対する理解が不足しているのではないか。そんなものどかしい思いが、本書を書く動機の一つになった。

中国人である王懿之氏が、一九九二年に書かれた『聶耳伝』はともかくとして、私の著書について、「そうした偏りがみられる」との記述は心外である（ここで「献身」は「渾身」の転換ミスか、或いは「貢獻」の書き間違えか）。

私が拙著『歌で革命に挑んだ男 中国国歌作曲者・聶耳と日本』（新評論、二〇一五年）を書いた動機は、これまで革命音楽家として聖人視されてきた聶耳は、その音楽が与えた影響から革命音楽家と呼ばれるに相応しいが、同時に同時代のごく普通の若者という面をもっていたことを紹介したかったからである。この点で久保先生の執筆動機と実まったく同じなのである。

ではなぜに久保先生は拙著に対しこのような「誤解」をされるに至ったのか？ 以下に私なりに推察してみた。

私の推察が妥当かどうか、久保先生をもちろん読者諸氏の判断を仰ぎたい。

私が革命音楽家として崇められてきた聶耳に対し、彼もまたごく普通の若者という面をもっていると知り、親しみを感じるようになったのは雲南省・玉溪市在住の在野の研究者——崎松氏の著書を読んでからである。玉溪は聶耳の父の生まれ育った地であり聶耳の本籍地であった。崎松氏の著書『聶耳と玉溪』（民族出版社 一九九九年）について、私は、本誌『東

方』（二五九号、二〇〇二年九月号）に「中国国歌作曲者が身近に」と題して紹介したことがある。崎松氏の著書は、若き日の聶耳の恋愛などを記述する中で、聶耳の聖人ではない若者らしい側面を紹介したものであった。だから私は小文にこのようなタイトルを付けたのであった。

次に回り道をするようだが聶耳の実像を理解する上で『増補版 聶耳全集』の刊行について述べておきたい。聶耳については、一九五〇年代に簡単な一冊本の『聶耳全集』（万象書店）が刊行された。だが本格的な全集は没後五〇年を記念して一九八五年に刊行された『聶耳全集』（文化芸術出版社・人民音楽出版社）が最初である。これは二巻で構成されており、上巻が音楽編、下巻が文字編（文稿、書信、日記、記念図片）となっていた。音楽編はともかく、下巻の文字編は職業的な作家でもなく、また弱冠二三歳で亡くなった若者の遺したものを蒐集し判読するだけでも大変な仕事であったろうと推察される。

さらに二〇一一年に翌年の生誕一〇〇年を記念して『増補版 聶耳全集』（文化芸術出版社）が刊行された。両全集とも編纂委員会が設けられ何年もの準備期間を経て刊行されたものである。

さて増補版全集である。増補版は三巻構成となった。上、

中巻は旧全集と同じだが、下巻が、「記念文章」三四編、「回憶文章」六六編、「研究文章」三九編で構成されている。個人の全集でこのような文章が付されるのは珍しい。聶耳の死後、おびただしい数の回顧録が書かれ、論文が発表された。様々な媒体に書かれたこれらの文章・原稿を厳選し一冊に収めたのだからこれは有難い。私が長年にわたって各地で蒐集してきた文章が何篇も含まれていたが、その数倍の文章が収録されていた。

私は、この三巻の全集が刊行されたときに、やはり本誌（三七八号、二〇一二年八月号）に「偉人かくあるべき」を越えて」と題して紹介原稿を書かせていただいた。このタイトルから私の小文の狙いをご理解いただけた。私はこの紹介文の最後を、「本増補版『聶耳全集』の刊行によって、とも

すれば、偉人かくあるべき」或いは「左翼」史観に呪縛されていた聶耳研究がいま新たなフィールドに向かうことが出来るようになったことは喜ばしい」と結んだ。

つまり私はこうした新資料を読み込んで、「当時の中国にいた多くの普通の若者の一人であった事実」を確認し新しい聶耳像を描いたつもりである。ではなぜ久保先生は私の意図を読み取っていただけなかったのか？

本書の冒頭で、久保先生は凡例として参考にした文献について説明をされている。最初に、「聶全集」・聶耳、一九八五『聶耳全集』全二巻、文化芸

術出版社。

とある。あれ、久保先生は二〇一一年に刊行された『増補版聶耳全集』を御存じないのか？ と思った。先生は聶耳の作

## 迎仏鳳儀の歌

—元の中国支配とチベット仏教—

乙坂智子 著  
元のモンゴル人王侯たちが、あれほどまでにチベット仏教を尊崇したのはなぜか。元の中国支配、なかでも漢民族社会に対する政治的圧力という視点から考察する。 ■12000円

## 桂林唐代石刻の研究

戸崎哲彦 著  
中国桂林に現存、または最近まで存在した唐・五代の石刻、約20箇所60数点に関する現地調査による実証的研究。 ■14286円

## 中国桂林鍾乳洞内現存古代壁書の研究

戸崎哲彦 著

鍾乳洞内の石面に唐宋人が直接毛筆で記した壁書、落書き、が伝える貴重な文物の克明な記録。

■15741円

白帝社

※価格は税別

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1  
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272  
http://www.hakuteisha.co.jp

文や日記など十数件を引用しているが、これはすべて二巻全集からである。さらに読み進めていくと、三巻本からの引用もあるにはあった。①司徒慧敏「在暴風雨中誕生」(二二三頁)と②向廷正「影片《風雲兒女》及其主題歌《義勇軍進行曲》」(二三四頁)の二点である。巻末の文献一覧には三巻全集も掲載されている(なお八五年の二巻全集について、久保先生は文化芸術出版社の名だけを記しているが、これは人民音楽出版社との共同出版だった。二〇一一年の三巻全集は文化芸術出版社単独となっている)。聶耳についての基本文献が網羅されている三巻全集を十分に参考にしておられないのではとの懸念が沸き上った。その理由は主に二点ある。

その一つは、その誤解が上記の私への批判に繋がるのだが、「聶耳は中国共産党に近いところにいた」(六頁)という認識である。近いところにはいたのではなく、聶耳は共産党員であった。聶耳の入党は一九三三年の年初である。聶耳の入党は田漢が紹介者で、夏衍が立ち合い人であった。

久保先生は、

「共産党が武装蜂起した記念日である八月一日に注目していた「同前、下巻二四二頁」。ただし、このような文章が残されていること自体、この時期、聶耳が共産党に入り、その組織的な活動に参加していたわけではないことを明瞭に

示す事実でもある。もし共産党員であったならば、弾圧の口実となるこんな危険な文章を不用意に残すはずがない」と述べておられる。(二二五頁)

「共産党が武装蜂起した…」これは一九三〇年のことであり、確かにこの時点で聶耳は共産党にまだ入党していない。だがこの後先に記したように聶耳は一九三三年に入党しているのである。聶耳の入党は、田漢の「聶耳勝利的道」(三巻全集二三頁)や王懿之の伝記(二三三頁)にも明確に記載があり、榎本泰子の『楽人の都・上海——近代中国における西洋音楽の受容』(研文出版、一九九八年、二一九頁)にも記されている。なお拙著で記したが、入党立ち合い人の夏衍は、聶耳が日本に亡命する際、「上海の共産党組織は彼を日本に送り出すくらいの力は具えていた」と團伊玖磨氏に語っていることも付け加えておきたい(團伊玖磨『降ってもパイプのけむり』朝日新聞社、一九九四年、二五八頁)。

次に久保先生が、義勇軍行進曲は日本で生まれたこととさら強調されていることに触れておきたい(二二三頁コラム)。これは書名にもなっているのだが、このことを強調されることの意味が理解できない。これは、先に久保先生が三巻全集から記されている文献一覧の二番目・向廷正「影片《風雲兒女》及其主題歌《義勇軍進行曲》」論文中の一節「《義勇軍

進行曲』の定稿は聶耳由日本寄回来的」に書かれていると知り、初稿は中国で書かれ、友人たちが証言しているようにほぼ出来上がっていたが、最終稿は日本で書かれ送られてきた、これに尽きるのである。タイトルが一人歩きして、嵯隆氏のように本書を紹介した文章の中で、「…聶耳は映画完成前の四月に日本に渡り、音楽会などに通う日々を過ごし、楽譜はその合間に書かれて上海に送られたものだった」（『東亜』一〇一九年、Book Review on Asia）と誤解してしまう人が現れるのである。

なお若干細かなことであるが、本書を読んで気がついたことをいくつか記しておきたい。

①一六七頁他 聯華歌舞班、聯華影業会社が連華と表記されている。国語審議会による「同音の漢字による書き替え」があるので誤りとは言えないが、固有名詞の場合はそのまま使用するのが通例ではないか。

②一八頁 周恩来が学び、聶耳も通った東亜高等予備学校が東亜学校に改名したのは一九四〇年ではなく、一九三五年五月である。これは『東亜学校一〇周年記念』誌に記載されている。聶耳が在学中に変更になった。

③四三頁 辛亥革命の際に活躍した多くの軍人を輩出した昆明にある学校は雲南陸軍講武学堂でなく雲南陸軍講武堂

である。

④二三〇頁 「さらに一九八六年、聶耳の胸像を建立、」とあるが、これは胸像ではなくレリーフである。先生には聶耳終焉の地、藤沢市の鵜沼海岸にある聶耳記念公園にぜひ足を運んでいただきたかった。

⑤二二四頁及び二三八頁 向延生が向廷正と記されている。向延生は二度の全集の編集者であり、特に増補版全集では実質的な責任者であった。革命の聖地・延安で一九三九年に七月一日に生まれたことが誇りの向先生である。全集には九本の論文が収録されている。中国音楽史研究の第一人者である。

⑥目次の後に地図があるが、ここで昆明とハイフォンを繋ぐ鉄道を雲南鉄道と記しているが、これは滇越鉄道である。

最後に蛇足になるが、拙著『歌で革命に挑んだ男 中国国歌作曲家・聶耳と日本』の中国語訳本『不愿做奴隶的人 聂耳传』が七月に北京の新星出版社から刊行された。序文を寄せていただいた向延生先生は、「これまで中国で神格化されていた聶耳について、著者は聶耳の人そのものに注目し若者らしい特徴を二度の全集に収録されなかった新しい資料を使って描いている」と書いておられることを付け加えておきたい。

（おかげさき・ゆうじ 元中京学院大学）